

---

# 犬死

はち味

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

犬死

### 【NZコード】

N6374Y

### 【作者名】

はぢ味

### 【あらすじ】

人の言葉がわかる犬と一人の少年の物語。

## 犬とその飼い主（前書き）

これはまだ未完成の作品です。  
完結するまでにがらりと物語が変化していくことがあります。  
ご注意ください。

## 犬とその飼い主

「くそババア！」という罵声「」ときが聞こえても、あたしはなんとも思わない。

それがボクの飼い主の言葉だ。

ボクと一緒に散歩しているだけで、「くそババア！」と、自分よりひと回りも小さい子どもに罵られる老婆。

それがボクの飼い主だ。

飼い主はいつも怒ったような顔をしている。四六時中、いつも。とはいって、飼い主が家の中にはいるときは、その顔を確認できないので、どんな表情をしているのかわからない。

けれど少なくとも、ボクと一緒にいるときは、喜、哀、楽などの顔も見せない。怒の一点張りなのだ。

態度も立ち振る舞いもそつけない。他人が喋りかけてきても、相槌は打たない。うなずきもしない。あろうことか、とある条件下において、飼い主は他人に向かって大声を張り上げる瞬間がある。マジギレするのだ。

そんな破天荒な飼い主だからボクが飼い犬になつたときから（あるいはそれ以前から）、近所に話し相手はいない。いや、どこにもいないと聞いかけたほうが正確だろう。

ともかく、孤独な人なのだ。厳しく言えば、嫌われ者だ。飼い主

の味方は、この世に誰一人として、いない。

しかし、一匹の味方が、いる。

それがボクだ。

たとえ何があらうと、ボクはこれから先もずっと飼い主の味方でありつづけることを心に誓つていて。この首のリングにかけて。なんて、さつき家の中から聞こえてきたせりふを真似てみたりして（語弊がないように言つておくと、もちろんこれは本心だよ）。

突然がらがらと引き戸が開く音がして、ボクは聞き耳を立てた。もう散歩の時間か。

鍵を施錠する音が聞こえたのち、玄関先に飼い主が現れた。ボクはとっさに体を起こして、犬小屋から出る。

「今日もついてくんのか、このクソ犬は」

あきれたような口調でそう言つて、飼い主は横目でボクを見る。きつい顔、きつい言葉。このお決まりの言動。ボクは毎日これを見聞きするために、犬小屋の中で寝そべっている。

ボクは、「わんっ！」とひと吼えして、飼い主のそばに駆け寄つた。今日も飼い主、線香の匂いがする。

飼い主は、「ふんっ」と不機嫌そうに鼻を鳴らして、歩き出す。ボクはその横に並ぶ。

本日、一度目の散歩。散歩、別の言い方をするなら見回りだ。近

所の見回り。

だけどこれはお巡りさんのように、お金をもらひ代わりにやっている仕事じゃない。飼い主とボクが、勝手気ままにやつていいことだ。

空から降りそそぐ月の明かりと民家からこぼれる光を頼りに、夜道を二歩ずつボクは進む。飼い主の歩幅、歩く速さに合わせて、まっすぐに進む。

ボクの首輪には、一般的の飼い犬たちとは違い、ひもがついてない。道行く人の中にはボクの姿を見た途端、おびえた顔になつて、すれ違いざまに飼い主を睨んでいくことがある。非常に失礼な人だ。このボクにかぎつて、見知らぬ人に危害を加えるようなことは絶対にしないのに。もう一度と、そんなことはしないと心に決めたんだ。

じゅりの敷き詰められた地面を通り過ぎて、コンクリートの道路に出た。じいを左に曲がる　　と思いきや、飼い主は右に曲がつた。こつもの進路と違ひ。

ボクは困惑した。そつちには、ボク専用のトイレはないからだ。知らぬ犬の尿の臭いがする。

そんなボクの心情は知らぬという様子で、飼い主はどんどん歩いていく。ボクは飼い主の行く方を追いかけた。

トイレの心配をすればするほど、局部のあたりがむずむずしてきた。まるで下腹部に氷を入れられて、それが徐々に溶け出したかのような感覚だ。足が地面をとらえるたびに、溶けた水は一ヶ所に集

中する。敏感な部分に。

だが、まだまだ我慢はできる。それに、いざとなれば無臭の障害物めがけて排泄すればいいだけの話だ。マーキングもかねて、一石二鳥のプランだ。

気持ちを新たに、ボクは前方を見る。幾数の電灯が道路の脇に立つて、真下に光を照らしている。どうぞここで用を足してくださいと言わんばかりに。ボクを誘うよ。

勝ったな、と思った。同時に、人に感謝した。便利なものを作ってくれてありがとう、と。

しかし同時に、あることに気づいてしまった。スポットライトを浴びながら、そのスポットライトを支える電柱に尿をかけるというのは、いかがなものか、と。

人の世界には、礼儀というものがある。挨拶を交わしたり、握手を交わしたり、色々な礼儀が存在することを、ボクは何度も見てきた。

ボクも以前、ある人たちに礼儀の作法を教えられたことがある。

「お座り」と言われたら、後ろ足をたたむ。

「お手」と言われたら、前足を出す。

「おかわり」と言われたら、お手の逆の手を出す。

これらの作法を実践すれば、人はたちまち笑顔になつて、とても

喜んだ。ときには「褒美をくれた。今はもう、あのとき覚えた作法を使う場面は、ほとんどないけれど。

だが、だからこそ、今が礼儀をはたすチャンスじゃないだろうか。まあ、別に放尿を我慢ただけで、人は笑顔にならないし、褒美はもらえないけれど、感謝を態度で示すのが、ボクは何よりも気持ちいいのだ。

せめて光を発しない障害物まで、せめて光を発しない障害物まで。ボクは心の中でそう繰り返しながら、歩みを進めた。

その数分後。飼い主はあからさまに嫌な顔をして、「……早くしろよ」と言った。

ボクは円錐型の光の中心で片足を揚げて、放尿の快楽にひたつていた。我慢のあと的小便が、何よりも気持ちよかつた。無数の虫の声が、ボクに声援を送っているような気がした。気がしたのだ。

負けたな、とは思っていない。またしても気づいてしまったのだ。ボクが礼儀を尽くすのは、特定の人だけだったということに。

つまり現時点での特定の人というのは飼い主ただ一人だけでありボクが放尿を我慢することによって歩く速度が遅くなり同行している飼い主に迷惑をかける可能性がある以上だんじてこれ我慢はよくないよね、という結論に達したのだ。このロジック。どう?

理論派を氣取りつつ、片足を揚げた状態で、はい、ポーズ。決まつたね。

「……先、行くぞ」

との声がして、ボクはあわてて飼い主の背中を追つた。まだ途中だつたのにもかかわらず。あつ、後ろの右足に少しかかった。

ともあれ、夜の散歩はのどかで良い。ときおり、ボクらのすぐ横を猛スピードで通り過ぎて行く自動車が怖いけれど、日中の散歩よりはマジだ。日中は人通りが多い。人通りが多いと、氣の滅入ることが多くて困る。飼い主に対する悪口を聞くのは嫌いだ。

前方に人影が見えた。影の輪郭や動きから推察するに、おそらく老人だろう。真正面から、なおかつシエルエットだけを見ても、腰が曲がっているのがわかる。

人影と間近に接近した。やはりボクの予想はあたっていた。影の正体は老婆だった。老婆はボクを見下ろして、「まあ、かわいいワンちゃん」と、顔をしわくちゃにしてほほえんだ。

「このワンちゃんは、なんて名前を……」

老婆は言いかけて、やめた。飼い主の顔を見て、とまつたのだ。ボクらは、その場に硬直した老婆を置き去りにして、歩きつづける。

ふとして、ボクは飼い主を見上げた。飼い主は、まるで背中に棒を張り付けたように背筋を伸ばして、きびきびと手足を動かしている。飼い主とさつきの老婆、一人の顔だけを見比べれば、それほど歳は離れていないように思う。しかし、拳動や姿勢には大きな差があつて、この差はいつたいなんだろうと考えるに、さきほどの老婆はおだやかな顔つきをしていたのに対して、飼い主ときたら大しけの海原よりも消えない波を顔に作っているゆえ、周囲の人と与える印象の差は歴然で、かたやみなに好かれる優しいおばあさん、かたや子どもにまで憎まれ口を叩かれるおばあさん、どとのつまり、ボクがなにを言いたいのかと言つと、憎まれつ子世にはばかるという有名なことわざがあり、その言葉を拝借して結論を導き出すと、飼い主が年齢の割にやけに元気なのは……、と答えを出す寸前で、右の前足に激痛を感じた。思考中断。見やると、飼い主のくつが、ボクの足の上に乗つかつていた。

「……悪い、つまづいた。もう私も、そろそろ歳かもしれない」

飼い主は白々しくそう言つて、ずんずん前に進んでいく。偶然、なのだろうか。もしくは、ボクの気持ちがわかるのかもしれない。だったら、嬉しいな。足はちょっとぴり痛かつたけれど。

痛みにしごれる足を引きずりながら、ボクは飼い主の隣に並んだ。

不意に、妙な臭いがした。生ゴミのような、腐臭。前進するに付れて、その臭いはますます強くなつて、ボクは吐き気を覚えた。

なるべく臭いを感じないように鼻呼吸を抑えてさらに進むと、道端にゴミがばらまかれていた。無残に引きちぎられたビニール袋。その中から柑橘系の果物の皮とティッシュがはみ出でている。

歩みをとめる、飼い主。

ボクも立ち止まつた。耳をすますと、がさがさと物音がした。

近くに電灯がないため視界が悪くてわかりにくいが、前方には老朽化した木で作られた囲いがある。ゴミ捨て場だ。

そこになにかがいるようなのだ。人間か、あるいは猫か、それとも。

ボクは慎重かつ繊細に、薄氷をふむような思いで、足音を立てぬよう地面をふみしめる。このように得体の知れない生き物に遭遇した場合、極力相手にこちらの存在を悟られないよう接近して、その正体を把握したのち次の行動に移る、というのが最良の策だと思うから。インテリジェンスなボクならではの、頭脳的策略だ。

しかし、そんな策略をけ散らす存在が隣にいた。飼い主は、まるで自分の存在を周囲に示すかのように、荒々しく地面をけつた。

途端、物音が消えた。夏虫の鳴き声の音量が一気に大きくなる。

当然だが、得体の知れない生き物がこちらに気づいたようだ。すぐに逃げ出さないことを考えると、こちらの出方をつかがっているのかもしない。

この場面では相手を警戒させてしまつような拳動は絶対に避けるべきだ。なるべく穏当に、距離を取つて速やかに場を離れることがお互いのためになるだらつ。衝突、争いは双方にとつて損だ。なにも生まれない。だから……つて、あれ？

飼い主？ ちょっと！？

ボクの考えに反して、飼い主は飘々と正面に突き進む、わが道をゆく。つもりなのかどうかは知らないが、それ以上先に行けば間違いなく攻撃される。安全は保証されない。

「わんわんっ！」

ボクはとつさにほえて、危険を知らせようとした。が、飼い主の手足はノンストップ。やめられない、とまらない。

ついに危険地帯に足を踏み入れる すんでのとなりでその場にとどまつた。

「だからともなく、低音の唸り声がした。犬が威嚇するときに出すような声だ。」

ボクは急いで飼い主の隣に駆け寄って、その声の正体を視認した。牙をむき出しにして、唸り声を上げていたのは小柄な犬だった。体毛の色から判断するに、日本犬の雑種だ。首輪はない。ちょうど、えさを求めてゴミ捨て場を漁っていたところだつたのだろう、牙に生肉の破片が引っかかっている。

すぐに襲い掛かつてこないことを考えると、この雑種は自分の力量を理解しているようだ。

自分より体の大きな犬と、それをさらに体格で上回る人間と対峙して、勝てる見込みはない。けれど、決して弱みは見せない。

まだまだ若造に見えるが、頭の悪い犬ではなさそうだ。世渡りの術を心得ている。

「……ちつ

なぜか舌打ちをして、飼い主は肩にぶら下げた小汚いバッグから棒状の白い物体を取り出した。それは骨に模したスナック菓子だつた。ボクが大好きなおやつだ。犬専用のやめられない、とまらない、あれ。

なんて、言つてゐる暇はない。このパターンはだめだ。またしても、ボクのおやつがなくなつてしまつ。唯一の楽しみが！

「わんわんわんわんっ！！」

ボクはとつさにほえて、未来の空腹を知らせようとした。が、飼い主の手はノンストップ。すつと背後に引いて、手前に投げ出した。

やめられない、とおらない。

骨は飼い主の手を離れて宙を舞い、放物線を描いて地面に落下。『うるさい』と鋭い音を立てながら転がり、（ボクのだったはずの）おやつは雑種の田前で静止した。

雑種はたじろぐよつて半歩後ろに下がり、（ボクのだった）おやつを猜疑の田で観察している。

一方、飼い主はと黙つて、そんな雑種の様子をじつと（ひたて）見守つている。

やがて、雑種が動いた。（ボクの）おやつに鼻を近づけて臭いを嗅いでから、ぱくりとかぶりついた。口元からよだれをしたたらせながら、ひたすらおやつを咀嚼している。

咀嚼、咀嚼、咀嚼。

あのおやつは、かみ始めてから数秒後にうまみのピークを迎える。……思い出すだけで、だ液が口の中いっぱいにあふれる。等しく、悔しそも胸いっぱいにあふれる。

と、ボクが気を取られていた刹那だった。

「……ふつ！」という力のこもった声と同時に、飼い主が突如、左足を上げて、したたかに地面を踏み鳴らした。

ボクは心臓が口から飛び出すんじゃないかと懼つてからいびつくりした。いきなりなんてことをするんだ！ 健康診断の方のドックがしやすくなるじゃないか！

雑種も驚いたのか、瞬間的にその場から飛びのいた。そして、ふたたび唸りながら飼い主をねめつける。その日は、怒り半分、とまどい半分といったところだろうか。とても正しい反応だ。あいにくボクも同じ心境だから。

「ああ、とつとどじつか行け！」

飼い主は怒氣を含んだ声でそうわめきながら、一度、二度、三度と地面を強く踏み、雑種を追い払おうとする。つい一分ほど前に、雑種にえさを与えた人物とは思えないような豹変つぶりだ。まあ、普段の言動からすれば、こけらの姿が眞実とも言えるけどね。

飼い主の剣幕に圧倒された雑種は、危うくおやつ落としそうになりながら、小走りで暗闇に消えていった。

「……バカ犬が」

飼い主はそう毒づいて、大きくため息をついた。そうして、いきなりしゃがみこんで、辺りに散らばったゴミを素手で拾い集め始めた。

不意を打たれたので多少うろたえてしまつたが、飼い主の突拍子のない行動には、ちゃんとした理由があることをボクはわかつている。この飼い主をただの人格破綻者と思うことなかれ。事情を知らない人の目にはそう映るかもしれないが、実は『わざと』このよつな役を演じているのだ。

詳しいことはボクにはわからないけど、飼い主がいわく、

「『野良が嫌う人間』と、『人間が嫌う野良』が平穏に共生していくために、私はこうしている」

とのことなのだ。簡単に言えば、『平和の使者』になろうとしているらしい。

ちなみにこの事実は、ボク以外に誰も知らない。「誰にも明かしていらない」と飼い主本人が言っていた。

ボクがそんな思い出にふけっている間にも、飼い主は黙々と穴を開いた黒いポリ袋に「ゴミ」をつめこんでいく。

ひとしきり片づいたところで、肩をぐるぐると回した飼い主がこちらを一瞥して、「お手」と右手を差し出してきた。

ボクは迅速に手を逸らした。たまにありふれた主従的行動に出たと思いつかず、とんだひねくれっぷりを秘めているから困る。誰がみんな汚い手に触れるものですかい。これでも潔癖症なのだ。年がら年中、ところ構わず四足歩行している生き物が言うのもあれだけれど。

「……はあ」

飼い主は大仰に息をはいて、すっと立ち上がった。

「これだからしつけのなってない犬は」

明日のおやつ抜き、と言葉をつけ足して、軽い足どりで歩をきざんでいく。

さすがに、これにはあらがつてもいいよね？

と、ボクは自分の心に問いかける。問いかけと言つより確認だ。いぐら恩義のある飼い主と言えど、このやり口はあんまりだ。一回がぶりと手をかんでやらねば、ストレスで狂犬と化してしまつかもしれない。

まあ、もちろんそんなことはしないけどね。

ボクは、なにをされても、どんなことがあっても、飼い主と一緒にいるだけで、それだけでいいのだから。

## 前の飼い主

「ママー、あたしこの子がいい！」

透明のガラス越しに聞こえてくる快活な声。ほっぺたの真っ赤な少女が、左手で隣にいる大人の女性のズボンを引っぱりながら、右手でボクを指さしている。

女性はボクを見ると朗らかな笑みを浮かべて、少女の頭をなでた。

「みつちゃんが面倒をみるのよ」

「うんっー。」

少女はぶんぶんと頭を上下させた。

そんなやりとりがあつたのち、見慣れた顔の男性がボクの入っているケースの鍵を開けた。

少女が、「わあっ！」と声を上げて、ボクの頭に触った。女性も膝を曲げてしゃがみつつボクの背中に手を置いた。

「ママー、気持ちいいね！」

「そうね」

少女と女性は顔を見合わせて笑った。

一人がなぐのをやめると、ボクは見慣れた男性につかまれて、

鉄格子のついたかごに入れられた。鉄格子の間から見える男性の顔は、終始ほころんでいた。いつもこの人に食事をもらっていたので、ボクはこの人が好きだった。だから、この人が嬉しそうにしていると、それだけでボクも嬉しくなった。

「じ」来店ありがとうございました

かごに入れられたまま外に出た。視界が上下に揺れる。浮遊感がある。聞きなれない音が聞こえる。身になつとりとまとわりつくような暑さを感じる。舌がすぐに乾いてしまう。

外の空気に触れるのは久しぶり。かごに入れられて移動するのはこれが初めての体験だつた。また、激しい危機感や不安を覚えたのも、このときが初めてだつたのかもしれない。

「わんっ！　わんっ！　わんっ！」

不安がつのればつるほど、わめきたい衝動にかられ、そうせざるを得なかつた。かごのあちこちに頭をぶつけて痛くとも、暴れずにはいられなかつた。すると、ますます舌が乾いた。やがてボクは暴れるのをやめた。

がたんと足元に衝撃を感じて、視界の揺れがおさまつた。浮遊感もなくなつた。目の前が少し暗くなつた。鉄格子の外は、灰色一色の壁。他には何も見えない。匂いが変わつた。今までに嗅いだことのない匂い。だが、決して不快なものではなかつた。

しばらくすると、足下から轟音がした。同時に、身体が後ろに引つぱりれて、とつたに四足でふんばつた。

引っ張られる感覚がなくなり、気のせいだったのかと油断した瞬間、今度は前に引っ張られた。そしてさうにほ、前後左右不規則に引っ張られる始末。もう何がなんだか、訳がわからなかつた。

そんな感覚にも慣れて、徐々にそれが楽しくなり始めた頃、強弱を繰り返しながら鳴りつづけていた轟音が消えた。

「ママー、早くわんわん降ろしてよー、早く早くー。」

かすかにそんな声が聞こえた。

がちや、と金属音がして、灰色の壁が遠ざかっていく。ボクはまぶしくて、目を閉じた。またもや、生ぬるい暑さと浮遊感に包まれる。

むづくつと皿ふたを開けると、少女がボクの顔をのぞきこんでいた。少女は、にっこり白い歯を見せて、いっついた。

「よひー。」

少女の背後には、とても大きな建物がそびえていた。真っ白の壁と真っ黒の屋根が特徴的な建物だった。

「あたしのお家へー。」

「ひしてボクは、とある家族の一員になつた。今の飼い主と出会う七年前の話だ。」

## 家族の一員

お家と呼ばれる建物には、パパ、ママ、みつちゃんの三人が住んでいた。

大きい男性がパパ。大きい女性がママ。そして小さい女性がみつちゃん。それぞれが互いにそう呼び合っているので、ボクもそう呼ぶことにした。もちろん心の中で、だけれど。

ちなみにボクは、みんなから「ポーチ」と呼ばれていた。最初に言い始めたのはみつちゃんだ。ボクと初めて会う人全員に、「ポチじゃなくて、ポーチ！」と得意げに紹介していた。

とある日、パパが、ボクを見つめながら、「女性に喜ばれそうな名前だな」とおどけた感じで言つてママを笑わせていた。ママが不自然な笑みを浮かべたまま、「ポーチの毛の色とおそろいのポーチが欲しいな」と呟くと、パパは苦い顔をして部屋を出て行つた。このとき、お家で一番偉いのはママだということをボクは理解した。

お家に来た次の日から、ママと見知らぬ大きな男性によるしつけの指導が始まった。ボクは、お手、おわり、お座り、待て、の順に教わつた。

それらの作法を三日で覚えると、ママのそばで見ていたみつちゃんが、「ポーチ天才！」とはしゃぎながら、次は二足歩行をやらせようとした。みつちゃんは、他の犬にはまねできないような特技をボクに覚えさせて、自慢したかったようだつた。

だが、三日、七日と経つても二足歩行ができないことを知ると、

みつちゃんはすぐに諦めてしまった。その判断は正しいと思つた。なにせボクにはやる気が欠けらもなかつたのだから。たぶん、やつてできないことはなかつたはずだけね。

トイレの場所を完璧に覚えるまでに一週間かかつた。一日の排泄回数はおよそ八回。合計すると約五六六回。その内、二十回以上は怒られた。

ひるがえつて、家族のみんながどうして怒るのかを理解したボクは、腹が立つと、リビングのど真ん中で後ろの片足をあげてやつた。すると、みんながおおおおするのだ。その様相を見ると、ボクの怒りは自然に静まるのだった。

とはいって、みんなはいつもボクに優しくしてくれていたので、腹が立つことはめつたになかつた。

お家に来てから一年もすると、ボクに対するみんなの態度がわり始めた。

まずは、みつちゃん。前までは週に五回以上も散歩をしていたのに、今では週に一回になつた。思い出したかのようにボクの頭をなでては、すぐにテレビ画面の前に行つてしまつ。

パパと接する機会も減つた。毎週、休日になると、家族みんなで広い公園に出かけたものだが、その回数も著しく減つた。パパの談によると、仕事が順調で忙しいらしい。

ママはほとんど変わらなかつた。いやむしり、みつちゃんやパパがやつっていたボクとの散歩を、自ら率先して代役を務めるほどに可愛がつてくれた。しかし悲しいかな、ママがしきりに、「ダイエッ

ト、ダイエット」という言葉を呴き始めたのも、ちょうどビビの頃。ママのお腹に背中を預けると、まるで水上に漂っているように、極上に気持ち良かつた記憶がある。

だが、それから半年後、ダイエットに成功したママも、次第にボクを散歩に連れて行かなくなつた。

ボクは、みんなから飽きられた。

けれど、飼い犬としての最低限の待遇は得られていたので、別に不満はなかつた。「飯は一日一食。お風呂は週一回。散歩は週三回。あるいは、これでも恵まれている方なのかもしねり。

それに、ボクはテレビさえ見られるのであれば、他にはビビでも良かった。

その当時、テレビがボクの唯一の楽しみだった。

テレビを通じてたくさんの知識を得た。バラエティの笑いどころ、ドラマの泣きどころ、ニュースの怒りどころなどなど、人の文化を何となく理解できるようになつた。

数あるテレビ番組の中でも好きだったのは、コント番組だ。その理由は、みつちゃんが欠かさずコント番組を見ていたから、とうのもあるけれど、毎回ボクの期待を上回る斬新な内容に心を打たれたのだ。

視聴者（犬）の予想を意図的に誘導して、なおかつ最後に裏切るその手法は、「お見事！」の他に言葉はなかつた。程度の低いことをやつてこようが、実は高度なことをやつていた。知識を得れば

得るほど、彼らのコントが完成されていることにボクは気づいた。

また、コントは総じて、『人を笑わせる、楽しくさせる』目的で作られているというその純粋な姿勢に深く感銘を受けた。

誰も、悲しまない、悲しませない。それはすばらしいことだと思った。

## 本当の犯人は！

ある日を境に、パパとママの様子が急変した。それはママの体重がリバウンドしてから三年後のことだった。

毎晩、パパが暗い顔で帰宅するようになつた。

ママの口癖が、「節約、節約」になつた。

一人は、料理の並んでいない食卓で深刻そうに会話をするようになった。ときおり、ほんのささいなことで喧嘩も勃発した。昔の人の作ったことわざの通り、とてもボクが食えるような代物ではなかつた。

みつちゃんも少し変わつた。小学五年生になつてから、しきりにパパを避けるようになつた。リビングでテレビドラマを見ていっても、パパが会社から帰つてくるや、途端に部屋にこもつてしまつ。部屋では友達と電話していることが多く、笑い声がときどきリビングまで響いてくる。

その声を聞くたびに、パパはビールを飲みながらため息をつくのだった。

みつちゃんとママが、それぞれ泊まりの用事で出かけているときのことだった。ボクはいつものように、フローリングの床にあごを乗せながらテレビをながめていた。近くのソファには酒臭いパパが座つていた。

「ポーチ。おいで」

唐突に、ずいぶんと久しぶりに、パパに名前を呼ばれた。ボクはテレビから目を離して、パパの顔を見た。

パパは珍しい顔をしていた。最近は眉間にしわを寄せているところしか見なかつたが、そのときは違つた。まるで、数年前の、みつちゃんにしか向けることのなかつた穏やかな顔。父親を知らないボクがこんな比喩をしていいものかわからないが、父親の顔、というやつだつた。

「ポーチ」

おいで、とパパは繰り返し言つた。

なんとも間の悪いことに、今までにサスペンスドラマのストーリーがクライマックスを迎えていて、謎の犯人の正体が明かされようとしている直前だつたゆえ、非常に気乗りしない命令であつたが、飼い主には絶対服従なので、ボクはしぶしぶパパの元に向かつた。

「よしよし、いい子だ」

ほめられて、なでられる。しきりに、なでられる。誰かの分までなでられているのではないかと思うくらい、なでられる。がさつに、それでいて、愛情がこもつてている手つきだつた。

そんな最中にも、

『 本当の犯人は！』

と、お決まりのせりふがテレビから流れていた。ボクは聴覚に全

神経を集中させた。はたして物語の大詰めはいかに！

『　日下部史郎じゃない、そこ』「なあ、ポーチ。パパな

パパは、テレビの音声にかぶせるように、

『　だー』「実は浮氣してるんだ」

ぽろりと衝撃的な言葉をつぶやいた。犯人の名前は、ついに聞き取れなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6374y/>

---

犬死

2011年11月21日11時38分発行